

【論文】

江戸時代「月次風俗図」の主題について

——江戸東京博物館蔵「月次風俗図」巻を中心に——

*我妻直美

目次

はじめに

一、江戸東京博物館蔵「月次風俗図」巻の概要

(1) 描かれている年中行事

(2) 様々な特徴

(3) 制作年代について

二、もうひとつの主題

(1) 身分階層の限定

(2) 三井越後屋両替店との関係

三、「月次風俗図」ともうひとつの主題
おわりに

はじめに

江戸東京博物館に一巻の「月次風俗図」が所蔵されている(第1図)。江戸時代に描かれたであろうことはその絵画様式などから疑いの無いもので、巻頭に七月の七夕の情景が描かれ、八月、九月と順に続き、巻末には十二月の師走の情景が描かれている。この一年の後半部分のみ描いているという点については、当初一月から六月を描いた上巻と、七月から十二月を描いた下巻の二巻揃いであったものが、いつしか上下巻離ればなれとなり、下巻に相当する本資料のみ当館が所蔵することになったと考えるべきであろう。

しかしこの図巻の各月の場面をみていくと、その描写力には優れたものがあり、そこに選ばれた主題が実に明確に、精緻に、そして工夫を凝らして描かれていることがわかってきた。そしてさらに、

この図巻に選ばれた主題の性格や画中に描かれた様々な情報を確認していくと、制作年代の推定と同時に、この図巻が年中行事を月ごとに順次描いたタイプの一般的な「月次風俗図」であるばかりでな

* 当館学芸員

キーワード 年中行事 月次風俗図 十二ヶ月風俗図

小町踊り 芝神明(飯倉神明社) 三井越後屋



第1・1图 「月次風俗图」(7月)



第1・2图 「月次風俗图」(8月)



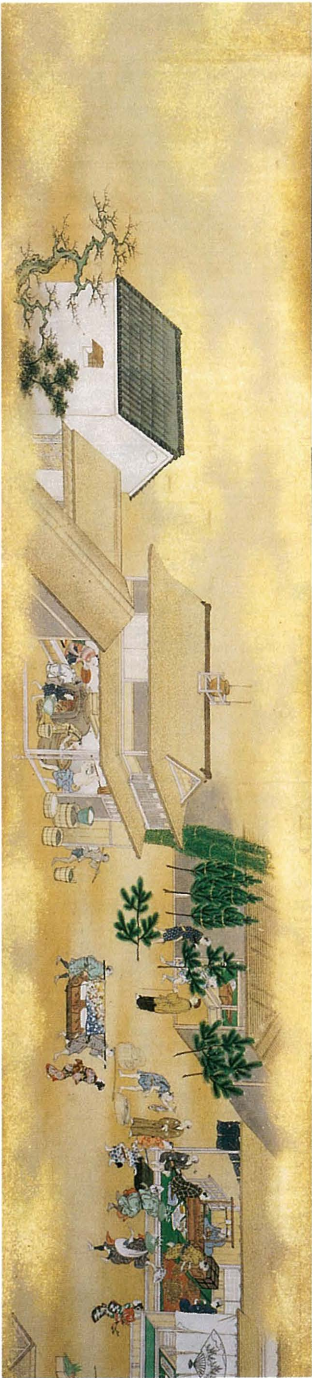
第1・3図 「月次風俗図」(9月)



第1・4図 「月次風俗図」(10月)



第1・5图 「月次風俗图」(11月)



第1・6图 「月次風俗图」(12月)

く、江戸時代の一事象を反映した、独自の主題をも合わせ持つ可能性が高いことを推測するに至った。

以下小論では、まず最初に当「月次風俗図」巻に描かれている内容や表現上の特徴を詳しく紹介する。そうした後、この図巻に込められたもうひとつの主題について明らかにしていくこととする。そして当該図巻の独自性と資料性の高さを指摘するとともに、当時の「月次風俗図」をより深く理解するためには、そのへもうひとつの主題」というものにも、今後は積極的に目を向ける必要があることを指摘したいと思う。

一、江戸東京博物館蔵「月次風俗図」巻の概要

(1) 描かれている年中行事

この資料は、平成六年の夏に当館で開催された『江戸の夏——その涼と美——』展において初めて公開された¹⁾。その際基礎データも紹介しているがここで改めて記しておく、素材は幅二七・七cmの紙で、横に五枚の紙を継いでおり、その長さは第一紙より、一三・八cm、一三四・五cm、一三四・六cm、一三五・三cm、一三一・八cmで、全体ではおよそ六・七mを数える。筆者を知る手掛かりは何も無いものの、金銀を含めた上質な絵の具を用いて大変丁寧に仕上げられており、その巧みな筆運びとあいまって、絵師の力量を窺い知ることができる。では具体的にどの様な内容が描かれているのか、巻頭の七月より順次みていくことにする。

【七月】(第1・1図)

家々に短冊を付けた笹が飾られていることから、七月の七夕であることがわかる。とりわけみる者の目を引くのは、最初の場面に登場する華やかな集団である(第2図)。

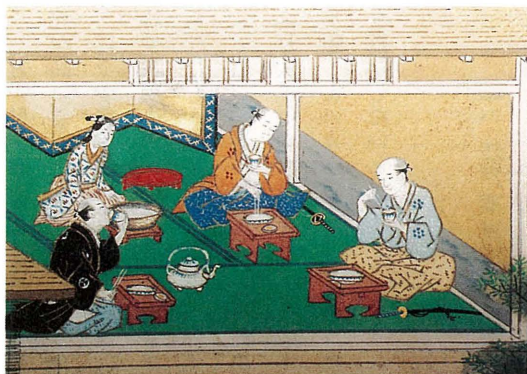
これは中心で肩に担がれている少女達の風俗等から、七月の風習である小町踊り、別名七夕踊りの一群であることがわかる。江戸時代におけるこの踊りの様子を詳しく知る手掛かりとしては、文政九年(一八二六)に柳亭種彦が記した『還魂紙料』という随筆がある²⁾。この中で種彦は「七夕踊り 小町をどり かけ踊」という一項を掲げて、小町踊りに関する記事を多数集めているのであるが、ここでは

その中のひとつ「明和元年江戸住老人筆記」として紹介してある『中古風俗志』を次に載せてみる。

昔は七月六日比より、
小町踊りというふ事は
やりて、七八歳ごろの
女子、紅絹の留金入な
どにて鉢巻をさせ、下
髪、頭に造花をかざり、
色々美しき手櫛をかけ
て、達なる染もやうを
着せ、団太鼓に房のつ



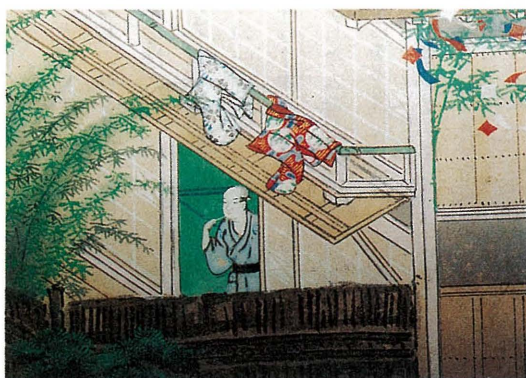
第2図 小町踊り



第3図 索麵

食べているところを描いたものであろう。小町踊りの描写に比べると地味な存在であるが、七夕風俗のひとつとして忘れてはならないものである。そしてさらに画面を左にみていくと（小論においては、以下の左右は全て画面に向かつてのものとする）、家の軒先に美しい着物が掛けられているのが目に止まる（第4図）。階下で楊枝を使う男と合わせ

て少々うがった見方をすれば、かたや小町踊りの名残りの着物（晴れ着を着用し終えて干しているところ）、かたや索麵を食べ終えて一息入れる姿、と共に右場面で展開していた七夕祭りの諸行事の終焉を表現しているとも取れる。また男の視線の先には、この画題の最後を締め括るように川が流れているが、七夕行事は古来水の祭とされ、そして七夕の翌日には笹飾りを川に流す風習もあったという。このことをふまえれば、この川はこの画題の最も本質的な面を伝えるものであると同時に、七夕の終了を伝えつつ次の場面へと導く、重要な役割を担っていると考えられよう。



第4図 着物と楊枝を使う男

きたるを持せ、四五人も召仕ほどの町人の娘は、肩車に乗せ、乳母抱守等つきそひて、日傘をさ、せ、そのほかの大勢娘子供手を曳、盆々ほんは今日あすばかり、あしたは嫁のしほれ草といふ歌をうたひ歩行しが、（以下略）³

画面と比較しながらこの資料を読んでみると、当図巻の表現が実的確であることがよくわかる。あたかもひとつの記録文とその挿絵のごとく一致していて興味深い。小町踊りの絵画資料として、この図柄は貴重なもののひとつになるのではないだろうか。⁴

さて次に、通り沿いの家の二階で食事をする男達に注目したい（第3図）。彼らは御馳走というよりも、大きな鉢に盛られた一品を取り分けて食べているようである。これは七夕の行事食の索麵を、皆で

【八月】（第1・2図）

池に張り出した舞台の上で華やかな舞が繰り広げられ、岸に面した築山の上から、男達がそれを眺めている。空に満月が出ていることから、これは月見の宴の贅沢な余興を楽しんでる様子だということが理解できる。

さて踊られている舞は、槍踊りである（第5図）。槍踊りとは、もともと大名行列の奴が槍を振って歩く姿を舞踊化したものであった⁵。それがやがて若衆姿や女形



第5図 槍踊り



第6図 千木箱売り



第7図 生姜売り



第8図 手水所

姿で踊るようになり、元禄四年（一六九一）水木辰之助が京都で踊ったのを皮切りに、元禄八年（一六九五）には江戸市村座でも披露され、以後艶やかな姿の槍踊りが大流行するに至った。「煤掃きや諸人がまねる槍踊り」という其角の句が残されているくらい、広く庶民にも親しまれたようである。いわゆる「月次風俗図」において月見と槍踊りが組み合わされた例は珍しいが、流行を常に反映してきた浮世絵には槍踊りを描いたものがあり、この画題が当時の流行を敏感に取り入れたものであることが理解できる。

【九月】（第1・3図）

八月から画面を進めていくとまず立派な社殿が大きく描かれ、次第に境内の賑わいの様子へと転じていく。出店の中の小さな箱を売る店（第6図）、そして境内の外で点々と生姜を売る者達（第7図）の所々まで目が至れば、これが江戸の飯倉神明社の九月の祭礼であることがはっきりする。飯倉神明社の祭礼は、別名生姜市とも言われているように、生姜を売る店が沢山出ることでも有名であった。また小さな箱は、千木箱ちぎばこと呼ばれ、竹のわっぱに藤の花が描かれているもので、中に飴などを入れて売った祭りの縁起物である。このふたつの特徴的な事柄以外にも、千木箱を売る店の左隣にある、単なる手水所がかなり大きく扱われている点に注目すれば（第8図）、これは神明社の水で目を洗うと目の病が治る、という民間信仰を反映しているように思われる。また同じく右隣の店は、甘酒屋ではないだろうか（第9図）。明治三十八年（一九〇五）に菊池貴一郎が著した『江戸府内絵本風俗往来』⁽⁶⁾には、門前の花露屋という化粧品屋が祭りの日に甘酒を売っていたという記録があり、さらに天保九年（一八三八）の斎藤月岑による『東都歳事記』⁽⁷⁾にも、祭礼の日に産子の家々では甘酒を造り、訪れる人に甘酒を振る舞う風習があったと記



第9図 茶屋と覗きからくり



第10図 恵比須講の宴会



第11図 恵比須講の台所

している。描写されている情景はいずれの内容とも異なるようであるが、これらのことから窺える、飯倉神明社と甘酒の關係の深さを感じ起こさせるには十分である。また祭りと言えば見世物等が付きものであろうが、江戸時代この神明社もその賑やかなことは広く知れ渡っていた。画面にひとつ描かれた覗きからくりは(第9図)、それを伝えるよすがとなろう。

ちなみに、「月次風俗図」において特徴ある祭礼は、描かれた資料の地域を特定する重要な手掛かりとなる。京都では祇園祭礼が最も有名なもののひとつになるが、江戸の場合は大川の舟遊びでそれと推察するものが多い(特に江戸初期の肉筆画において)。もっとも近年、六月に山王祭礼、九月に神田祭を描いた、江戸初期に制作されたと思われる屏風をみる機会があったが、江戸の特徴ある行事を積極的に描いたものとして珍しい例に属すると思う⁸⁾。当該図巻もその

この場面で興味深いのは、画面の半分が宴会の支度をする台所の様子に当てられていることである(第11図)。既に恵比須の前には魚をはじめとする供物が据えられているが、台所ではさらに鯛や蛸、その他の魚、そして大根や人参と思しき野菜が次々と料理されようとしている。ひとつひとつの材料を見ていくだけでも心楽しい。これだけの食材を集め、蔵には山と米俵が積まれているところをみると、かなり裕福な家と言えよう。

【十一月】(第1・5図)

引き続き座敷が舞台となり、現在の七五三における五歳の男児の祝いにあたる、袴着の情景が描かれている。内容をより詳しく理解するには、前出の『江戸府内絵本風俗往来』が参考となるので、少し長くなるが次に紹介する。

将軍家より諸大名衆、或は高家の方々に至りては、旧式の御家

意味で、明確に江戸の年中行事であることが打ち出された「月次風俗図」として、注目に値する。

【十月】(第1・4図)

九月と画面を分かť小さな土手が紅葉に染まると、画面は一転して恵比須講の場面となる。床の間に恵比須の姿を祀りその前で賑やかに宴会を開くのは、商家の重要な十月の行事である(第10図)。



第12図 袴着



第13図 正月飾り売りと扇屋



第14図 松飾りの準備と餅つき

法の次第ありて、この編つくす限りはあらず（この前文に、祝いのための衣類や膳、進物にはかなりの費用がかかることが記してある。〔筆者注〕。旗本衆の幼君は麻上下に振袖の衣紋を整え、馬上に打ち立ちたる姿は愛すべく、馬前に立つ二人の馬丁は浅黄地に白く主人の印染め抜きし法被に、同色の股引・白足袋をはき、（中略）町家に至りては男子女子とも料と優美をつくしたる衣類を着飾り、帯・腰帯の結びに至るまで好みをつくし、実母或いは叔父母介添なし、乳母また守りも付き従い、（中略）御世の豊を知られたり。

当図巻の図柄を念頭に浮かべながら改めてこの資料を読んでみると、当該「月次風俗図」の袴着の場面は、質素な武家のものであるが、華やかな商家の様子を伝えていることがわかる（第12図）。登場

人物は皆筆を尽くした美しきで描かれ、庭にも見物の人々が訪れている。手を取って主役の男の子に着付けをしているふっくらとした体軀の女性は、『江戸府内絵本風俗往来』にあるように、いかにも乳母らしい姿である。その奥にいる女性は男の子の叔母か守りか、いずれにせよ華やかで贅沢な祝いの様が伝わってくる。

【十二月】（第1・6図）

最後は師走を迎えた街中の風景である。右半分は年末の忙しさに追われる扇屋と両替屋を中心に、街を行き交う節季候や弓矢売り、正月の飾り売りが描かれている（第13図）。両替屋の景気の良さが窺い知れるが、道を隔てた左側の場面では、着々と松飾りの準備が進み、餅がつかれ、正月がもうすぐそこに来ていることが察せられる（第14図）。

巻末は、新春の花の季節を待つ梅樹の姿で締め括られている。

(2) 様々な特徴

以上、当該「月次風俗図」巻の内容を通覧してきたが、そこから看取できる絵画資料としての特徴を以下にまとめる。

まず最初に、表現上の特徴として、取り上げた画題に対する描写が、大変丁寧で正確なことがあげられる。

たとえば、七月の七夕を描くに当たつての行事全体を見据えた視点、すなわち七夕の様々な風習を画面全体に点在させている点や、小町踊りに見られる正確な風俗描写などは、七夕行事の絵画資料として貴重なものと言えよう。この描写態度は、十一月の袴着の場面にも共通するもので、どちらも文字資料との明らか一致が興味深い。また九月の飯倉神明社の祭礼における境内の描写も同様で、一見賑やかなどこにでもありそうな祭礼風景であるが、千木箱、生姜売りはもとより、そこに描かれた祭礼の要素は、いずれも飯倉神明社を特徴付ける絞りに絞つた要素であつた。無駄無く適格に、飯倉神明社祭礼の特徴ある姿を描いている。

そして第二に、巧みな画面構成をあげたい。

八月の月見、十一月の袴着を除けば、いずれの画面も長く取られている。鑑賞者が右から左と巻き込みながらみていくにしても、長過ぎてひと月を一覧するのはやや苦しい。がそこに様々な工夫を凝らして、場面を展開させている。

まず七夕の場面を取り上げれば(第1・1図)、右から小町踊りの進む賑やかな路上風景、素麺の膳、祭りの後を暗示する着物と男、そして川、と巻頭にふさわしい華やかなクライマックスを最初に配置し、徐々にトーンを落としていくという、映画でいうところのフエイド・アウトの手法が取られている。この手法は九月の飯倉神明社の祭礼の場面にも用いられており(第1・3図)、いきなり大きな本殿が登場し、賑やかな境内、参道と続き、最後は素朴な風体の生姜売りが点在して完結する。鳥居を中心に、立派な本殿から生姜を

売る簡素な店^{たな}まで、一直線の展開が面白い。そして次にあげられるのが、長い場面を一对一に区切つて見せ場を設ける構成である。十月の恵比須講では(第1・4図)、前半が座敷で盛り上がる宴会の様子、後半が宴会の裏方の忙しさと豊かな台所事情が活写されている。台所の様子も詳しく描く発想は、菱川師宣も用いている発想で特に目新しいものではないが、コの字に設定された屋敷の形や、その繋ぎ廊下の所に膳を運ぶ若衆を描いて場面の連続を示す配慮などは、ひとつの場面構成としても巧みである。これ程明確な構成ではないが、十二月も(第1・5、6図)、両替屋脇の通りを境に前半が主師走の商いの賑やかさを表現し、後半が門松、餅つきといった具体的な準備作業を描く、という発想が窺える。いずれも、各年中行事のポイントを捉えながら、上手く画面構成を仕上げている。

他には、月と月との場面展開の工夫にも触れておきたい。七月の末尾を飾る川の流れが、やがて八月の満々と水をたたえた池への導入となつていることは、先にも触れたとおりである(第1・2図)。また恵比須講の勝手口の先には橋があり、そこには食料を届けに来る男が描かれているが(第1・4図)、その橋の反対側には、逆方向に膳を担いで歩む男の姿もある(第1・5図)。これが次の月の袴着の祝いのためのものであることは、画面を進めれば明らかとなる。橋を中心にして、食物を手を左右へ別れる男達の姿は、同じ画面に描かれながら、それぞれ異なる主題へと導く役割を担わされているのである。この川と橋は、「繋ぎ」であると同時に「境界」でもあるという、二重の意味を持った存在となっている。

さて、第三としては、やはり冒頭にもふれた確かな筆運びと彩色の美しさがあげられよう。

様々な描き分けられた登場人物たちの姿態や着物の柄は、丁寧で美しく、しかも表現に固さが無い。顔の表情も上品で、様々な描き分けがなされていて細かい(第15図)。建物等の描写にも破綻は無く、とりわけ自然を描いた部分、たとえば八月の池に落ちる滝と白い洲浜の表現や(第16図)、恵比須講の庭先の紅葉(第17図)などもみるに値する添景である。そして使われている絵の具は色数も多く、発色も良い。また画面全体に掃かれた金砂子は二種の金を使い分けた華やかなものだし、画面の所々に登場する松は、いずれも皴に金泥が施されて美しく堂々と仕上げられている。実力のある絵師が、贅沢な素材を自由に用いて描いた感の強いこの図巻は、単なる既製品ではなく、特別注文によるものである可能性が高い。

(3) 制作年代について

前述の如く画題や表現上の特徴をみてきたが、それでは一体この



第15図 小町踊りの人々

「月次風俗図」巻はいつ頃のものであろうか。まず画題の面からみれば、先述したように、元禄年間(一六八八～一七〇四)に誕生した槍踊りが描かれてい

る。描かれた姿形も、当時の浮世絵師鳥居清信(一六六四～一七二九)描くところの槍踊りの姿とよく似ている。この図巻が元禄年間を中心し、以降槍踊りが人気を博していた頃までがひとつの想定時期となろう。

また七夕の小町踊りは、正保から寛文(一六四四～一六七三)の頃に盛んだったというのが従来の通説のようである。が前述の『還魂紙料』の中の『中古風俗志』の記述によれば、この図巻のように少女を飾りたてたり日傘をさして賑やかに練り歩く、派手な形態のものが無くなってしまったのは、享保の中頃とあり(享保/一七一六～一七三六)、逆を言えば享保初頭、あるいは元禄の頃まで、まだ華やかな面影があった可能性を示している。これは具体的には、『中古風俗志』と同様『還魂紙料』に引用されている元禄元年(一六八八)の『俳諧五節句』の、



第16図 滝



第17図 紅葉の土手

又昼は女童踊。これは薄の太鼓、塗撥を手毎にたゝき、染絹の鉢巻、帯を肩よりふらさげ、結びだすきと名づけ、都の大路を日傘さしかけて、踊りをかけに近づきの門にて踊るなり。これを小町おどりといふ、¹¹⁾

や、元禄三年（一六九〇）の其角選の俳句集『誰が家』の、
いろ／＼の傘さしつれてかけ踊¹²⁾（かけ踊は小町踊りの別名〈筆者注〉）

といった史料から、元禄初頭にはまだまだ小町踊りが盛況であったことが窺える。さらには、享保二十年（一七三五）の『続江戸砂子』の「小町踊り」の項をみれば、

十二三以下の少女、帯・腰帶やうの物を襟にかけ纏とし、団だ
いことて団のごとくなる太鼓にて拍子をととりて諷ふ。おどるに
はあらず、たゞむらがりてあゆみ行也。男子は此事なさず。¹³⁾

とあり、享保二十年に至っても、少なくとも色鮮やかな襷（当該「月次風俗図」の小町踊りの中で、肩に担がれている少女達の胸元にある帯状のもの）を用いた独特の装いによる小町踊りが続いていたことがわかる。しかし、寛延二年（一七四九）の『東都歳事記』では七夕の小町踊りの記述は無くなり、七月十五日の盆の挿絵において、手を繋いだ少女達と幼子を背負った女達が歌い歩く姿を認めるのみである。¹⁴⁾従って享保年間位までが、華やかな姿を實際に目にするこ
とができた時代と考えられよう。なお風俗画の中には、時に古い風俗を敢えて描いたものもあるが、当図巻の描写のように風俗が正確で、しかもこれだけの人数を描き込んだものは、管見の限り後述す

る善峰寺蔵「四季図巻」より他例が無く、また後の時代の摸本による、あるいは回想による描写には無い表現上の活気が感じられることから、ここではそのような可能性は低いと判断したい。

いささか小町踊りについて長く述べ過ぎたが、槍踊りと小町踊りという、とりわけ人々の眼を引いたであろうふたつの華やかな流行の風俗が、その姿を実際に見ることのできた時期を元禄から享保年間あたりで合致させているということは、制作時期を推定する上で無視できないことである。

さて次に、表現という点からみていくことにする。これは既知の絵画資料の中のどのような資料群と共通した表現様式をみせているかによって判断していくわけであるが、結論から言えば、元禄から享保年間に制作されたと推測されるもの達との共通点が目立つように感じられる。

たとえば、元禄時代を中心に活躍した英一蝶（一六五二―一七二四）のポストン美術館蔵「月次風俗図」屏風では、大画面と小画面という違いはあるものの、師走風景のような街頭場面において、店の先の表現と人物との大小関係や画面への接近距離等、全体的な雰囲気（15）が似通っており、また師走風俗にも共通点がある。もともと師走風俗はあまり特徴の出ないものかもしれないが、添景として両替屋が描かれていることは共通している。また、享保年間の作と紹介されたばかりでなく、さらに西山松之助氏によって享保五十六年の間に制作年代が推定された大英博物館蔵「江戸風俗図」巻も（第18図）、画面上下に掃かれた金雲の雰囲気がよく似ているし、明るい画



第19図 大英博物館蔵「江戸風俗図」巻の内「浅草の図」の覗きからくり

面に細々と丁寧に諸要素を描き込んでいく制作態度や、動きのある頭の丸い小柄な人物の体型、明るい色を多用した着物の描写、そして女性の髪型などに同時代的なものが感じられる。江戸博本と絵師の手は明らかに異なるし、大英博本の夥しい数の登場人物から発せられる熱気のようなものが江戸博本には欠如しているが、場面々々から受け取れる明るく小作りな画面の印象はよく似ている。そしてさらに具体的な例として、西山氏が珍しい描写であると注目



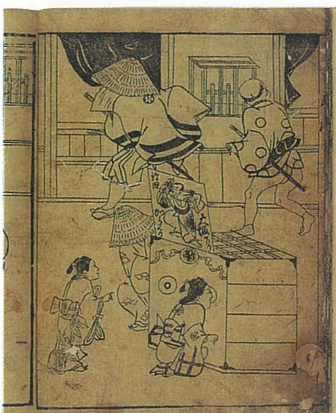
第20図 覗きからくり



第18図 大英博物館蔵「江戸風俗図」巻の内「浅草の図」(部分)

動きのある

された大英博本の覗きからくりの様子と(第19図)、江戸博本の飯倉神明社に描かれているもの(第20図)とが近似していることを指摘しておく¹⁸⁾。すなわち、覗き箱の上にはメリーゴーラウンドの様に丸く吊った小さな人形が数体飾られ、その前に看板が立つ。そして箱に開けられたのぞき穴の回りには花びらの様な装飾が施され、両手で複数の紐を引いて操る男は簡素な着物に傘を被った姿をとる、という特徴が一致するのである。他にも描写の似ている資料をみてみると、まず宝永(一七〇四-一七一)頃の出版とされる『遊君女郎花』¹⁹⁾のものは(第21図)、箱自体に施された装飾、看板の存在(「大坂下り」と書かれていることからこれが江戸の覗きからくりと想像できる)、そして傘を被った男の風俗、及び全体に丸っこい姿の人物描写などが江戸博本と共通している。また享保二十年の『絵本御伽品鏡』²⁰⁾では(第22図)、大坂の出版物ではあるものの、やはり大きな看板が立ち、そこには「大からくり」と江戸博本と同じ誘い文句がある。従って、ここでは覗きからくりの詳しい歴史は省くが、江戸博本に描かれた覗きからくりの形態が大体享保前後のものであることは想像できると思う。そして最後に、先に小町踊りの箇所でも触れた、善峰寺蔵「四季図巻」との類似点も紹



第21図 大東急文庫蔵「遊君女郎花」の覗きからくり



第22図 「鏡御本繪」の覗きからくり

介しておきたい。²¹ 全体として登場人物が

江戸博本より多く、華やかな印象が強いが、画面上下に金砂子を置き、彩色も明るい点や、小作りな

人物像や金泥をあしらった樹木の描写等に、共通した性格が見出せる。特に先述した小町踊りの場面や、その他袴着の場面等にみられる風俗表現の丁寧さや豪華さは、同種のものと言って差し支えないと思う。そしてさらに、その善峰寺本には、五代將軍綱吉の生母桂昌院（一六二四〜一七〇五）寄贈の品であるという言い伝えがある。善峰寺本自体の検討をここで詳しく述べる余裕は無いが、明るく華やかな上層階級の人々の生活を描いた視点や、その華麗な出来栄えは、桂昌院にまつわる伝承にふさわしく、彼女の生没年からして、この図巻は元禄期（一六八八〜一七〇三）かそれに近い頃に制作された可能性が高くなる。

さて結論として、江戸博本「月次風俗図」は、ボストン美術館本、善峰寺本との類似が認められつつも、大英博本との類似点も多く、その風俗描写における享保期的な性格は大きい。従って、大英博本と同じ頃、享保年間前半あたりに、やや古い様式も残しつつ描かれた、とみるのが妥当ではないだろうか。

二、もうひとつの主題

さて、いささか資料紹介が長くなってしまったが、ひと月ごとの画題についての精査を終えた後改めてこの図巻を通覧してみると、「年中行事」という一目瞭然の画題と共に、もうひとつの主題によって各場面が構成されている可能性に気付かされた。以下、その主題について明らかにしていきたいと思う。

(1) 身分階層の限定

元禄期以降の「月次風俗図」の中に、その画題をある特定の身分の人達の年中行事に限定して構成する資料があることは、すでに武田恒夫氏らによって指摘されており²²とおりである。そのような視点に立ったとき、江戸博本「月次風俗図」が町人、それもかなり富裕な商人の生活を対象としていることが理解できるのである。

その理由として、まず第一に画題として取り上げられている風俗、あるいは注目されている風俗は、いずれも裕福な町人のものである。たとえば七夕の小町踊りに関する「中古風俗志」の記述を改めて確認すると、「四五人も召仕ほどの町人の娘は、肩車に乗せ」という記述があるので、まずこれが町人の娘を中心とした行事であることがわかる。と同時に、この図巻では少女全員が肩車されていることから、とりわけ裕福な娘達の風俗に重点が置かれていることもわかる。²³ また本来十月の恵比須講が商人の商売繁盛を願う行事であることは、多くを述べる必要もないことであろう。そして十一月の袴

着の行事が、町人層の風習を伝えるものであることは先に指摘したとおりであるし、ここに描かれた家庭が、町人の中でもかなりの資産家であることは華やかな支度から容易に推察できる。

さらに細かい描写にまで目を向ければ、恵比須講の場面の半分を占める台所や米倉の様子は、この家の豊かな生活を知るに十分であり、積極的に財力を誇示しているかのようである。そして一件平凡な師走風景となつている十二月の場面でも、その中心に描かれた両替屋の素晴らしい繁盛振りが目を引く。俵の様なボリュームを持つた銭差の束、金銀の絵の具も鮮やかな大判、丁銀の数々。そこで両替を依頼するのは武士であり、より一層両替商の、つまり武士ではなく商人の、圧倒的な財力というものが浮かび上がってくるように感じられる。また場面左側の正月準備に重きを置いた場面においても、家の中に「正月」と読める大福帳がある点は、新年へ向けての商家の準備に対する細かな目配りが感じられるし、最後に大きく蔵を描いている点も、この一年間の蓄財が意識されているように思われる。

以上のように、この「月次風俗図」巻は単に年中行事を羅列したのではなく、富裕な商人の生活風景を描いたもの、しかも飯倉神明社の存在から、江戸の町人を描いたものであることが確認できるのである。そしてさらに考察を進めた結果、次に述べるように三井越後屋の江戸両替店との関係が深いのではないかと思うに至った。

(2) 三井越後屋両替店との関係

この推測のきつかつたとなったのは、師走場面の扇屋の店奥に置かれた、扇の紙を入れる箱の大きな「井桁」に「三」の商標である(第23図)。この図巻の中でこれ程明確に書かれた商標、あるいは紋や文字の類は無く、唯一の存在である。画中の紋やデザイン化された文字に、画題に関する重要な情報を込めるといふ発想については、これまでにも江戸時代初期に描かれたMOA美術館蔵「湯女図」の着物にみられる「沐」の字や、同じく徳川黎明会蔵「伝本多平八郎姿絵」におけるヒロインの着物の「葵」文様、そしてその後の浮世絵における紋を利用した見立ての手法等が知られている。これらに対しては既に様々な考察・指摘がなされ、その存在の重要性は明らかである。ここに書き込まれた周囲の丸が無い商標自体は、厳密には三井越後屋のやや格下の者の暖簾分けに際して送られるものとのことであるが、とりあえずここでは格にはこだわらず、これによって



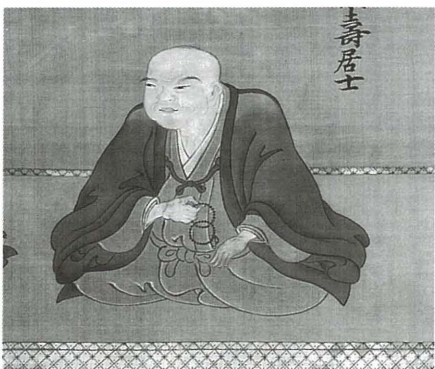
第23図 扇屋の箱の「井桁」に「三」



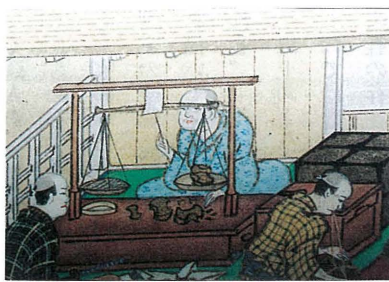
第24図 両替屋



第26図 三井文庫所蔵「三井高利夫妻像」(部分)



第27図 三井文庫保管「三井高利夫妻像」(部分)



第25図 両替屋の主

〈三井越後屋〉という区別されるべき存在が暗示されたとして当該図巻を見直すと、他にも三井越後屋との関連を示す要素があることに気付かされたのである。以下、その内容についてまとめてみたい。

ア・両替屋の存在

まず最初に、師走風景に描かれた両替屋の存在に着目したい(第24図)。先にも述べたように、この両替屋の繁盛振りは大変素晴らしいものがある。文字通りの金銀銭の山である。⁽²⁶⁾

さてここでさらに注目したいのが、この両替屋が金と銀を扱っているということである。つまり当時金と銀

を扱えたのは主に本両替商という限られた両替屋の特権であったことを思い起こせば、この店が銭ばかり扱う脇両替商ではなく、数少ない本両替商であることが理解できる。その点を三井越後屋で確認すると、三井越後屋の江戸両替店は元禄二年(一八六九)に本両替仲間に加わっており、以後享保前半頃までに三井越後屋の両替店は急成長を遂げている。しかも元禄の頃、江戸には十数店の本両替商があったとされるが、実際には三井や鴻池といった新興勢力が急速に伸びていった時期であり、旧来の本両替商の多くは衰退の一途をたどりつつあった時期である。つまりここで、両替商界の勢力交代期に当たるとこの元禄から享保年間が、この三井越後屋の大発展期であり、先に推定した当図巻の制作時期と一致することは見逃せない。すなわち、当時十数店あったとされる本両替商ではあるが、実際にその頃この図巻に描かれた程の景気の良さを謳歌できたのは、その中のさらに一部の店、つまり鴻池か三井かどこかということになる。そうするとそのような時代背景の中で描かれた〈繁盛する両替屋〉の隣の扇屋に、「三」に「井桁」の商標が特筆されていれば、この両替屋に三井越後屋の両替店の姿を思い起こすことはそう難しいことではなからう。

ちなみに、正月の挨拶代わりに知人や得意先に扇子を配るという風習が、商家にはあったという。ここに描かれた、「三」に「井桁」印の箱の扇子は、三井越後屋が正月に配るために用意しているものであるろう。

さて次に指摘しておきたいことは、ここに描かれた両替屋の奥に

座る主人の姿(第25図)、三井家初代の三井高利の姿絵に類似しているということである。店の主人の姿は、図巻中の他の人物像に比して明らかに顔も頭も大きく、頭頂は平らになっており、また背はやや猫背になっている。この、顔が大きく頭が平らになっているという特徴は、三井文庫所蔵・保管の高利像とよく似通っているのである(第26、27図)。三井文庫本はいずれも高利婦人が一緒に描かれているのであるが、婦人の姿と比べるとその特徴ははつきりして行く。

もつとも、英一蝶筆「月次風俗図」屏風の両替屋(本両替商ではない)をみると、同じように頭を剃った年配の男が店に座っている。先に指摘した人物像は、あるいは「両替商の主人」というひとつの典型となっているだけなのかもしれない。しかしながら江戸博本におけるあくの強さと姿全体を大きくはつきり描いている点に注目すれば、一蝶の描写とは明らかに一線を画すものがある。江戸博本の人物像には積極的に高利を想定した、絵師の意図というものが感じ取れるのである。

イ. 飯倉神明社の選択

二番目に着目したいのは、九月の年中行事として飯倉神明社の祭礼が取りあげられている点である。九月の年中行事として飯倉神明社の祭礼が選ばれている例は珍しく、江戸の「月次風俗図」の場合には菊を愛でる重陽の節句の様子か、神田明神の祭礼が選ばれる例が多い。飯倉神明社が描かれることによって当該図巻が江戸の地を舞台としていることがわかったのであるが、それ以外に、この行事を

選ぶに至った特別な理由が何かありそうである。

そこで考えられるのが、そもそも神明社は「伊勢神宮の分霊を勧請して祀った社である」ということである。つまり伊勢神宮を信仰の対象とする社なのである。ひるがえって三井家の歴史を考えると、三井家は伊勢松坂出身のいわゆる伊勢商人である。そして、京都、大坂、江戸と三都に店を構えた後にも、戸籍は松坂に残し、故郷の紀州徳川家に対し巨額の御用金を納めるなど、松坂との関係は緊密に続いている。またそもそも伊勢商人誕生の背景には、全国を回って祈禱を行った伊勢神宮の御師おんしの商人化があったという指摘もされている。これらのことを考え合わせると、三井家と伊勢、及び伊勢神宮との関係は、三井家の出自を語る上で大変重要なものであることが明らかとなる。

さらにこの考えを推し進めると、三井家も飯倉神明社も、伊勢を本拠地としながら江戸に分身を出したところ、その分身が江戸の地で大成を収めた、という共通する事実が見い出せる。前者の江戸店は、その雄姿が錦絵にも描かれる程駿河町で繁盛し、江戸の大店のひとつであると同時に、江戸名所のひとつとしてもその存在が知れ渡っていたことは改めて指摘する必要も無い。また後者の飯倉神明社も、江戸市中において最も産子の多い神社のひとつとして知られ、その祭礼の賑やかなことは様々な出版物や錦絵に記録されている。どちらも江戸の生活に欠かすことのできない程、江戸っ子の生活に密着し、親しまれる存在となっているが、共にその根っこが伊勢にあるということは重要な共通性であろう。

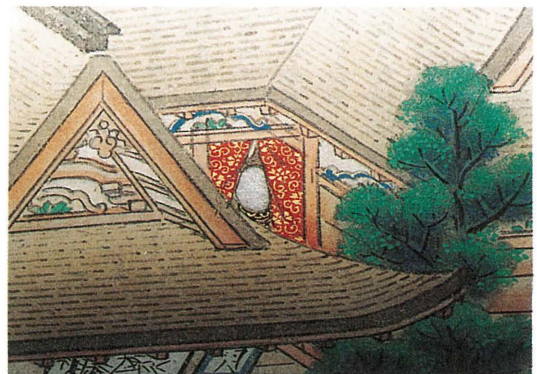
もつとも前述のような解釈には、牽強附会の感が残るかもしれない。伊勢という土地をめぐる緊密な関係が窺える飯倉神明社と三井家であるが、前記の推論は、いずれも飯倉神明社の御神体にまで注意が及んではじめて得ることのできるものである。御神体に認識が及ばなければ気付かない。そこでこの図巻の飯倉神明社の社殿をよくみると、建物の間からこっそり御神体が、銀色の鏡が、覗いていることを指摘しておきたい(第28図)。普通このような絵画の場合、御神体が覗いているなどということはほとんどない。もし御神体が描かれているとしたら縁起絵巻のようなもの類であろうか、つまりこの図巻を描いた絵師は、通常の発想からいえば描くことのない御神体を、この図巻の飯倉神明社については敢えて描き込んだということになる。これは飯倉神明社の御神体を鑑賞者に積極的に理解してもらうための、絵師が意識的に行った暗示ではないだろうか。江戸で賑わう飯倉神明社ではあるけれども、その御神体は、伊勢のものなのである、と。そして、三井家も、同じ伊勢出身なのである、と。

さて、以上の如く両替商の描写、そして飯倉神明社が画題として選ばれていること、この二点から三井越後屋江戸両替店との関係を述べてきたが、いずれも絵画表現、画題選択の視点から導き出された見解である。しかしこの「月次風俗図」を描いた絵師の、各画題(年中行事)そのものに対する正確で精緻な描写力や表現力、画題をよく理解した上での巧みな画面構成力や表現力といったものは、一章で詳しく述べてきたとおりである。そのことを念頭に置けば、

この絵師が、本両替商や御神体を描くことによって、これだけの意図をこの図巻に盛り込んだと理解するのも、決して不可能なことではないと思う。すなわち先にひとつひとつ確認してきたこの絵師の実力及び知識、表現力等を持つてすれば、

このような深い解釈のもとに画面を選択し、描写対象の取捨によって主題を暗示することは、十分可能だったと考えたい。

ちなみに蛇足ながら付け加えておくと、三井高利が江戸の両替店に座って直接商売していた可能性は低いし、また質素儉約を旨としていた高利が、この図巻にみるような豪華な年中行事を実際に行っていたかどうかは疑問が残る。つまり史実とこの図巻の描写内容は、ある部分においては多々異なる面があるということである。しかしそれを理由に、この図巻が三井家と無縁ということにはならないと思う。たとえば一章で既に詳述したように、飯倉神明社の境内の描写は、神明社を特徴付ける要素のひとつひとつが忠実に取りあげられてはあったが、その全体風景では、つまり境内での整然とした無駄の無い配置や見世物小屋の数などには、絵画としての画面構成上



第28図 飯倉神明の御神体

の効果優先されていることは明らかである。にもかかわらず、この場面は飯倉神明社を語るに必要なあらゆる情報を備えることによつて、飯倉神明社の「へ形」はともかく「存在」そのものを再現することに成功している。すなわちこの理解を図巻全体に当てはめれば、この図巻は当時の三井越後屋に関する大切な情報の蓄積を基に、当「月次風俗図」の中にその存在そのものを再構築していったと理解できるのである。

結論としてこの図巻には、享保頃の江戸の商人の繁栄の様子、とりわけ三井越後屋の両替店の繁栄の様が、もうひとつの主題として背後にあると解したい。「月次風俗図」という風俗画としては慣用的な表現手段を用いつつ、このような主題をも内包している可能性が高いことは注目に値する。江戸博本「月次風俗図」は、江戸の年中行事の風俗を視覚的に知る手掛かりとなるばかりでなく、江戸の大家商人三井家が武士をも凌ぐ力を持った時代のひとつの産物として、実に興味ある存在といえよう。

三、「月次風俗図」ともうひとつの主題

一見平凡な「月次風俗図」に過ぎない江戸東京博物館蔵「月次風俗図」巻であるが、前述の如く画題や描写内容をつぶさに確認していった結果、へもつひとつの主題」というものがここにはあると推測するに至った。

しかしこのような例は、つまり「月次風俗図」が、十二カ月の画

題全てを統括するもうひとつの主題によってまとめられているということや、その主題によって各月の画題が意図的に選択されているということは、当図巻だけに当てはまるものではないであろう。今ここで詳しく述べる余裕は無いが、小論を成すに当たり気の付いた二、三の例を次に紹介しておこうと思う。

ひとつは、先に再三引用した英一蝶筆「月次風俗図」屏風である。⁽²⁹⁾結論から言えば、この屏風は「月次風俗図」であると同時に「野外景物図」としての主題が一本通っている。道や境内を広く取っている点や、郊外の風景に力を入れている点等にそのことは窺えるが、このことをより明確に伝える場面がある。すなわち、場面の左半分を占める大きな鳥居と、その右側に簾のかかった小さな建物とを描いた十月の画面である。これは右半分の主題が恵比須講であることは問題無さそうであるが、左半分の鳥居は何処を示しているのだろうか。そこで思い浮かぶのが、鳥居とその右側にある恵比須の社という珍しい組み合わせが共通する、浅草の総鎮守西宮稻荷の恵比須開帳の行事である。⁽³⁰⁾十月の行事として一般的な恵比須講は、座敷での宴会風景による屋内の場面となるが、江戸の恵比須講行事の中でも屋外のものとして知られたこの行事なら、「野外景物図」としての要求をも満たす恰好の画題となる。一蝶は、一般的な恵比須講の宴会風景を選ばずに、恵比須講と野外景物というふたつの要素を合わせ持つこの場所を選択することによって、「野外景物図」という主題の完成を狙ったと考えられるのではないだろうか。もうひとつの主題を理解し、江戸時代の年中行事自体をもう一度見直してみるこ

とによって、一蝶が描きたかった重層的な世界が明確に理解できるように思う。

もうひとつは、静嘉堂文庫美術館所蔵の菱川師宣（一六九四）筆「四季風俗図」巻である。

この図巻については同館の小林優子氏が詳しく調査されているので詳述は省くが、同氏も指摘されたように人物描写に力を入れている点にその特徴があり、さらに今回の視点から述べればこれは「美人画」とでもいべき「月次風俗図」である。しかしその十一月の場面が遊里の張り見世と太夫道中となっており、何を主題としているのかよくわからない。吉原の十一月の行事にも、これに該当するようなものは特に無い。しかしこの図巻がとりわけ美しい女性の姿に力を入れていることを考慮すれば、これは吉原田圃の鶯神社の西の市における吉原裏門の開放を意味している可能性がある。この日人々は自由に吉原に入り、中の様子を堪能することができたという。もつとも、吉原田圃の鶯神社が人気を博したのは明和八年（一七七二）頃からということなので、宣師の活躍時期に照らしてこの推測はあやしくなる。とすると十一月の行事として一般的なもののひとつ、芝居の「顔見世」に吉原の「張見世」をひっつけたのではないか、という岩城紀子氏の解釈の方が可能性はるかに高そうである。³³ いずれにせよ、この図巻の「美人画」とでもいべきもうひとつの主題にこだわった結果、何か吉原の太夫達の姿によって語られる十一月の画題が設定されているに相違無い。他の月の画題が明確なことからみても、この場面は決して無意味な吉原風景として挿

入されたものではなく、「美人画」に相応しい十一月の画題が込められていると信じるべきであろう。また他の月といえ、二月の場面について小林氏は、「初午」に言及しながらも、その鳥居が大変小さい上、初午独特の賑やかな風俗が何も無く、ただ美しい人物が歩く様子しかないことから、控えめに「宮参り」という画題を与えるにとどめている。がこれなども、この図巻における「美人画」という視点を積極的に認めれば、二月の場面に鳥居、だけで十分「初午」という解釈は成り立つと思われる。師宣にとってこの図巻は、年中行事にのつとつた「美人画」なのであるから、描写対象の第一優先は美人であり、年中行事のシンボルが単なる小道具に追いやられていても仕方の無いことである。

他にも、団十郎の姿や歌舞伎役者の紋などを多数描き込んだものや、僧形の人物や信仰に関する場面が頻繁に描かれたものもみたとがあるが、これなども詳しい観察を施せば何か独自の主題が見い出せそうである。

以上述べてきたことには、まだ多くの検討の余地があろう。ここでの筆者の自問自答の解釈が、結論というには早過ぎる。だがこれらの例によって、いわゆる「月次風俗図」というものの自体が、その前面的な主題とは異なるもうひとつの主題を内包している可能性が高いことは理解いただけたと思う。すなわち、そこに描かれた年中行事について、年中行事そのものの内容を知ることから始めて、描かれている事柄、そして強調されている事柄、軽視されている事柄、様々な情報を確認していくと、各月の画面に共通する無視しきれな

い視点、主題が存在する場合があるということである。また逆に、一連の「月次風俗図」の中で、何が主題なのか、あるいは何故その画題が選ばれたのか、よくわからないものがあつたとしても、他の画面々々から得られたひとつの視点をよりどころに見直せば、その画題の内容や選択された意図というものが理解できる可能性もあるということである。「月次風俗図」に対するとき、年中行事という目前の画題にとらわれることなく、しかし年中行事そのものについてはよく吟味することによって、もうひとつの主題や絵師の意図というものを見抜く努力をしなくてはならないと思うに至った。

おわりに

ここで改めて小論の内容をまとめておくと、次のようになる。まず一章において、江戸東京博物館が所蔵する「月次風俗図」巻について詳しく内容を紹介した上で、その絵画表現上、および内容面での特徴や評価されるべき点をまとめ、さらに制作年代について享年間という時期を推定した。そして二章では、一章で行った検討をもとに、この図巻が一般的な「月次風俗図」という主題にのっとっているばかりでなく、江戸の富裕な町人層、あるいは三井越後屋の江戸両替店の繁栄振りをもうひとつの主題としている可能性が極めて高いことを指摘し、当該図巻が歴史的な資料としても意味あるものであることを確認した。そしてさらに三章においては、二章で得られた内容に示唆を得て、さらに数点の例をあげることによって、

従来単に年中行事を描いたものとしてのみの理解にとどまりがちだった「月次風俗図」という一群の絵画資料の中に、もうひとつの個性的な主題を持つものがあること、そしてそれを理解することによって、それらの「月次風俗図」に対してより深い解釈が可能となる、という私見を提出した。

もっとも、このような絵画の主題についての多面的な解釈の可能性自体は、「月次風俗図」に限ってのことではない。描かれていることの歴史的背景、文化史的背景等様々な情報をも視野に入れて主題に取り組めば、一見しただけではわからない色々なメッセージがみえてくる、ということは近年とみに語られていることであり、諸先達によって多くの成果をあげつつある。だが「月次風俗図」は、その〈月次風俗図〉という明確な主題に安住してしまいがちだからこそ、このような視点からの解釈がより重要となることは繰り返し述べておきたいと思う。

そして、最後に改めて触れておくと、江戸博本自体、最初に述べたように本来あるべき姿の半分しか残っておらず、二章に関しては要するに半分だけの情報で得た解釈である。上巻の登場によって小論の結論は大きく変わることになるかもしれないが、上巻の発見がおおいに待たれる。また検討の過程で、歴史、風俗、民俗等、分野に渡る事情を確認せねばならなくなり、筆者の勉強不足による誤解も多々あると思う。ご教示いただければ幸いである。

〔註〕

- (1) 『江戸の夏——その涼と美——』 展覧会図録（財団法人江戸東京歴史財団、一九九四年）参照。なお、江戸東京博物館での登録資料名は「江戸四季風俗図巻」であるが、小論では「月次風俗図」巻という名称を使用している。
- (2) 『還魂紙料』については、日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』新装版〈第一期〉12（吉川弘文館、一九九三年）を参照。
- (3) 『日本随筆大成』新装版〈第一期〉12の二六六頁から引用。
- (4) 小町踊りの一般的な図柄は、『還魂紙料』の挿絵に引用された小町踊りの描写、つまり独特の装束に身を飾った多数の少女達が、丸くなって太鼓を叩いて歌い、その周囲に傘を差しかける成人男女がいる図柄か（肩に乗る少女がいない）、当該図巻のように美しい装束の娘達が、肩に乗ったり歩いたり、傘を差しかけられながら移動していくものである。
- (5) 槍踊りについては、小野武雄編『江戸の舞と踊の風俗誌』（展望社、一九七四年）、野島寿三郎編『歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ、一九八八年）、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典 第2巻』（平凡社、一九九〇年）などを参考にした。
- (6) 『江戸府内絵本風俗往来』については、鈴木棠三編『絵本江戸風俗往来』東洋文庫五〇（平凡社、一九八九年）を参照。その一五七〜九頁を参考にした。
- (7) 『東都歳事記』については、朝倉治彦校注『東都歳事記』2、東洋文庫一七七（平凡社、一九八七年）を参照。その二六二〜三頁を参考にした。
- (8) 六曲一雙屏風の画面に、一扇ずつ独立した形態で大体次のような行事が描かれており、いわゆる寛永期風俗画の特徴を伝える人物表現をとる。なお図版は、狩野博幸他編『時代屏風聚花 続編』（しこうしゃ図書販売、一九九三年）の第140図を参照のこと。
- 一月／正月風俗、二月／涅槃絵、初午（？）、三月／花見、四月／灌仏会、五月／端午の節句、六月／山王祭礼、七月／小町踊り、八月／舟遊びと花火、九月／神田祭りの神事能、十月／恵比須講、十一月／輔祭り、十二月／師走風景
- (9) 『絵本江戸風俗往来』東洋文庫五〇の一九〇頁から引用。
- (10) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第六卷（吉川弘文館、一九八五年）の「小町踊」の項を参考にした。
- (11) 『日本随筆大成』新装版〈第一期〉12の二六三頁から引用。
- (12) 『日本随筆大成』新装版〈第一期〉12の二六七頁から引用。
- (13) 『続江戸砂子』については、小池章太郎編『江戸砂子』（東京堂出版、一九七六年）を参照。その三三四頁から引用。
- (14) 『東都歳事記』2、東洋文庫一七七の一七四〜一七五頁を参照。
- (15) 図版については小林忠・榎原悟共著『日本美術絵画全集』第十六卷 守景・一蝶（集英社、一九七八年）の第60図等を参照のこと。
- (16) 『江戸東京四百年記念 大英博物館秘蔵江戸美術展』展覧会図録（東京ルネッサンス推進委員会、一九九〇年）の一五二頁の作品解説より。
- (17) 橋崎宗重編『秘蔵浮世絵大観』一、大英博物館I（講談社、一九八八年）の二三五〜七頁の作品解説より。またここでは多数の図版を載せる余裕が無いので、全図等詳しい図版は同文献の第69〜91図を参照された。なお小論の内容は、一九九四年七月の第一〇六回日本近世絵画研究会において、口頭発表したものに基づいている。その際筆者にこの資料への注意を促して下さった、千葉市美術館準備室（当時）の浅野秀剛氏と大英博物館のティモシー・クラーク氏に、記して感謝申し上げます。
- (18) 覗きからくりの歴史、及び参考資料については、山本慶一「のぞきからくりと写し絵」（『芸双書 8 えとく——紙芝居／のぞきからくり／写し絵の世界』白水社、一九八二年）、古河三樹『図説庶民芸能——江戸の見世物』（雄山閣出版、一九八二年）を参考にした。
- (19) 大東急文庫所蔵本を確認。
- (20) 芳賀登監修・解説『日本風俗図絵集 日本風俗叢書』（日本図書センター、一九八三年）の七五九頁を参照。

- (21) 『近世風俗図巻』第二巻「江戸風俗」(毎日新聞社・一九七四年)の「江戸年中行事絵巻」(諏訪春雄氏解説文)を参考にした。図版についても、同書参照のこと。なお資料名が異なるが、同一資料である。
- (22) 武田恒夫『日本絵画と歳時 景物画史論』(ペリかん社、一九九〇年)。
- (23) 『中古風俗誌』のこの箇所を改めて読み直すと、衣装を凝らして団扇太鼓を叩きながら歌い歩く町娘達ではあるけれども、その中でも裕福な家の娘は使用人の肩に乗り、傘を差しかけられて移動し、その他の娘は自分で歩いていくことが理解できる。つまり、肩に乗る少女は特別に裕福なのである。そこで確認しておく、『中古風俗誌』の記述通り、同じように着飾った少女達が二通りの状態で行列を組んでいる例としては、ホノルル美術館所蔵の英一蝶筆「風俗画卷」がある。全体的な人数は少ないながらも、着飾って団扇太鼓を叩く少女達が肩に乗る者一人、歩く者二人、と分かれて描かれている点が記述に忠実といえる。従って、肩に乗せられ傘まで差しかけられている少女が、地面を歩く娘とは異なる豊かな家の娘として区別された存在となっていたことは確かなことなのである。ひるがえって少女全員が肩に乗っている当該図巻の描写は、よほど裕福な一行であることがより明確となる。なおホノルル美術館本の図版は、『近世風俗図巻』第二巻「江戸風俗」(毎日新聞社・一九七四年)を参照のこと。
- (24) 「湯女図」については、佐藤康宏氏の『絵は語る11 湯女図——視線のドラマ』(平凡社、一九九三年)が詳しく、前川誠郎氏の『日本の美術と世界の美術13 失われし絵を求めて』(狩野派と風俗画 日本美術全集月報)講談社、一九九二年)にも新しい見解が述べられているが、要するに「沐」の字にその女が湯女であることの暗示が込められているということである。また「伝本多平八郎姿絵」については、その「葵」の文様から徳川家康の孫娘千姫を暗示しているという伝承があり、筆者も一九八八年の第33回国際東方学者会議
- においてそれがかなり蓋然性の高いものであることを述べたが、高橋敦子氏の「本多平八郎姿絵」研究」(『哲学会誌』第十三号、学習院大学哲学会、一九八九年)における、「葵」の文様と「伝本多平八郎姿絵」の制作背景との関わりを指摘したものが、妥当性の高い見解と思われる。
- (25) 財団法人三井文庫編『三井事業史』本編第一巻(財団法人三井文庫、一九八〇年)の二五九―二六一頁を参考にした。
- (26) 江戸時代の両替商、及び三井家の両替店については、註(24)の文献の他、主に次の文献を参考にした。
- ・『三井両替店』編纂委員会編『三井両替店』(株式会社三井銀行、一九八三年)
 - ・安岡重明『教育社歴史新書 日本史』一三六 三井財閥史——近世・明治編』(教育社、一九八四年)
 - ・西山松之助他編『江戸学事典』(弘文堂、一九八四年)の「両替商」の項。
- (27) 小野武雄『江戸時代信仰の風俗誌』(展望社、一九七六年)の一七三頁の十一行目から引用。
- (28) 伊勢商人等については、前出の三井家関連文献の他、島田謙次『伊勢商人』(伊勢商人研究会、一九八七年)を参考にした。
- (29) 残念ながら筆者はこの屏風を实見したことがなく、本来あれこれ述べる資格は無いかもしれないが、幾つかの図版や解説をもとに思い浮かんだことをここに記す。なお、主に参考にした文献は次のとおり。
- ・小林忠・榎原悟共著『日本美術絵画全集』第十六巻 守景・一蝶(集英社、一九七八年)の小林忠氏解説文。
 - ・『在外日本の至宝』第4巻「障屏画」(毎日新聞社、一九八〇年)の武田恒夫氏解説文。
 - ・『ポストン美術館秘蔵』日本近世屏風絵名作展「展覧会図録」(日本経済新聞社、一九八一年)の解説文。
 - ・ポストン美術館東洋部編『ポストン美術館東洋美術名品集』(日本

放送出版協会、一九九一年）の東洋部員による解説文。

- (30) 西宮稲荷については、原田幹校訂『江戸名所圖會』（人物往来社、一九六七年）の「西宮稲荷祠」の項と、一六一六〜七頁にかけての浅草寺の絵図を参考にした。

- (31) 一九九四年四月の第一〇三回日本近世絵画研究会において、詳しいスライドと共に口頭発表されているが、出版物としては未発表の資料である。以下に引用する同氏の解釈はその折りのもの、及び後日別途ご意見を伺った際のものである。記して感謝申し上げます。

- (32) 宮田登『江戸歳時記』へ江戸へ選書5（吉川弘文館、一九八一年）の一〇三頁を参考にした。

- (33) 日本近世絵画研究会発表の折りにご教示頂いた解釈である。記して感謝申し上げます。

〔附記〕

脱稿後（一九九五年一月脱稿）、滋賀県立近代美術館において「月次絵―十二月の風物詩―」展が開催されることを知った。小論にその内容を反映できなかったことが心残りである。